

建学の精神と教育理念

高木英明

はじめに

皆さんが入学されてから丁度三週間、二十日ばかりが過ぎました。少しは大学の雰
囲気に慣れてこられたかと思いますが、まもなく五月の連休に入ります。今年の連休
は間が三日間ほど空いていて飛び石連休になっています。その間の日も授業をしない
でなぜ休みにしてあるのかと疑問に思った人があるかもしれません。私自身の経験か
ら考えますと、一日おいてまた休みという形の飛び石連休が続くと折角講義しても
身が入らない、先生の方も学生の皆さんの方も勉強する気にならなくて、やっている

意味がないのではないかという雰囲気がありました。そこで、多くの私立大学では飛び石連休になるゴールデンウィークは一週間ばかりを休みにしてあります。「あ、休みだ」と喜んで、いろんなところに行ったり、遠くからきている人は郷里に帰ったり、いろんな使い方があると思いますが、私が今日、お願いしたいのは、その連休の間に、この三週間、大学に入ってからこれまで見たり聞いたり感じたりしたことを反省しながら、これから後、どうやって大学生生活を楽しんでいくか、エンジョイしていかかを考えてほしいということです。

皆さんは聞いたことがないかもしれませんが、私の学生の頃、昔は「五月病」になる人が少なくありませんでした。どういう病気なのでしょう。本当の病気ではないんですが……。皆さんは受験勉強をどれくらいされたかわかりませんが、皆、大学に入りたいと思って高校を卒業するまでは大学に入ることを目標に勉強してこれたと思います。高校までの学校生活は時間割もきちんと決められていて、それに従って生活すれば別に問題はなかったと思います。ところが、大学に入ると、周りにいる人たちが全国のさまざまなところから来ている、多様な人々が存在しているというこ

建学の精神と教育理念

ともあるでしょうが、授業も自分たちで選んで、特に授業に出なくても叱られるということもなく、全く自由にほったらかされている状態です。その中で自分はこういうことをしているのか、勉強をしているのか、しなくてもいいのか、何を勉強したらいいのか、わからなくなってきました。目標が見えない、毎日生活している目標や生活の仕方がわからない中で、だんだん精神状態がおかしくなって、五月頃、何もする気がなくなった人のことを五月病にかかっていると呼んでいました。最近はそういうことがないのかもしれないのですが、そういう状況にならないためには、連休の間に、四月に大学に来てから感じたこと、経験したことをもとにしながら、この後、どういう勉強をし、どういう生き方をするかをよく考えてほしいということでもあります。

建学の精神と教育理念

今日は「建学の精神と教育理念」ということでお話したいと思います。何のことかと思われるかもしれませんが、この学園、大学、短大がどういう考え方でつくられて、

どういう教育をしようとしているのかということを知っておいてほしいと思うので、その基本的な柱としてお話ししたいタイトルをつけました。日本語は話し言葉として普通にしゃべっている時は意味はわかるのですが、専門用語とか独特の言葉が使われると、聞いているだけではわからないことがありますね。漢字を思い出して初めて意味がわかる場合があります。私がしゃべる言葉のなかには漢字を見れば少しはわかるような言葉がいくつも出てくると思いますので、プリントを見ながら判断して聞いてください。

構成は三つにわけてあります。最初はこういう考え方、目的でこの学園がつくられているのかということをいろんな部分を拾いだしながら説明します。基本的なことが表現されているのが「仏教精神に基づく女子教育」という建学の精神です。それだけ聞くと、仏教精神に基づいて教育をしようとしているのだなとすぐわかるのですが、では「仏教精神とは何ですか」と聞かれた時には、答えられない人が大部分ではないかと思えます。私自身も本当に正確に仏教精神が何かと言われても自信を持ってしゃべることができません。学長になって四年目ですが、過去三年間、私なりにいろんな

建学の精神と教育理念

本を読んで勉強してきた仏教精神とは大体こんなものではないかというところをお話します。正確なところは必修になっていく仏教学の時間に仏教学の専門の先生に尋ねて確かめてください。ここでは、仏教とは何か、仏教精神とは何かを私が理解している範囲でお話します。

建学の精神のもう一つの大きな柱が女子教育です。男女同権、男女共学、男女参画、共同社会と言われている世の中なのに、なぜ女子教育を柱としているのかということについても考えないといけません。十分理解していかないといけません、女子教育をどうという考え方で受け止めたらいいか、私が理解できている範囲でお話します。

入学式の時にもお話したと思いますが、大学は大いに学ぶところ、自分で学ぶ姿勢を持たなければ十分効果を挙げることができないところです。今日、私がお話することもすべて正しいことだと考えないでほしいと思います。問題点、疑問点についてはまた自分で調べてみるなり、仏教学の専門の先生にお話を聞いて質問して確かめてみてください。

まず、「建学の理念・精神」。理念と精神はどう違うのか。一般的には建学の理念と

言っているところが多いと思います。理念というのは「考え方」、あるいは「考え」と訳して考えるとわかりやすいと思います。どういう「考え」でつくられたか。英語では idea です。同時に精神というのは英語で mind とか spirit と訳されますので、若干の違いがあると思うのですが、同じように考えたらいいと思います。光華女子学園の建学の理念、建学の精神は「仏教精神に基づく教育」をすること。そこで仏教精神とは何か、なぜ仏教精神に基づく教育をしようと考えられたのが問題になります。創設者は浄土真宗という宗派の総本山である東本願寺のお裏方です。東本願寺という総本山で一番偉いお坊様のことを法主とか門首とか言いますが、その人の奥様がお裏方と呼ばれています。この学園をつくられたのは昭和一五年ですからもう大昔です。私も生まれてまだ七、八歳の頃です。お裏方がたまたま昭和一三、一四年の頃に中国に旅行され、北京に行かれた時、向こうの鉄道局総裁の奥様から真宗系の仏教に基づく女子学園をつくって経営していただけないとかというお話を受けられ、それでもなく北京に女学校をつくられました。その後、日本に帰られて日本にも仏教の精神に基づく教育ができる女学校をつくりたいとお考えになってつくられたのが、こ

の光華女子学園です。

生活の中の仏教

京都に住んでいる人は東本願寺がどこにあるかわかっていると思いますが、京都駅のすぐ近くの烏丸通に面して東本願寺があります。もう一つ大きなお寺の西本願寺が堀川通りにあります。同じ浄土真宗でありながら東と西に大きく分かれているのはなぜか、どうして二つあるのかというと、東本願寺は徳川家康があつた土地を寄進してつくられ、またそれより先に西本願寺が秀吉によって土地を提供されて堀川にできたからです。その前は一つで、ずっと歴史をたどっていくと、鎌倉時代の親鸞聖人が始められた宗派であることがわかります。仏教はさらにずっと遡っていくと、紀元前四〇〇年か五〇〇年の頃、今から約二五〇〇年前にインドの北の方の国の王子様であつたお釈迦様が悟りをひらいて始められた宗教です。その後どんどん広がっていろいろな宗派に分かれていきます。日本に入ってからいろいろな宗派ができて、浄土宗、浄土真

宗、禅宗など、さまざまな系統の仏教宗派ができています。その中の一つが浄土真宗です。この中にも宗派の檀家の人もおられるかもしれませんが。普通は若い人たちは仏教とか仏教精神と聞くと、自分たちとは関係のないこと、それはお葬式とか法事とかで必要なことという程度にしか考えていない人が多いと思いますが、昔はそうではありませんでした。昔の日本の家庭はほとんどが仏教の檀家になっていましたから、この家にもいつても仏壇が置かれていました。最近の家には仏壇さえ置かれていないですね。こんな話をしている私の家にも仏壇をつくっていません。仏教徒でもないということになるのですが、この中で家に仏壇がある人は手を挙げてください。数えられくらいになるのですが、この中で家に仏壇がある人は手を挙げてください。数えられくらいは僅かですね。圧倒的多数の人の家には仏壇が置かれていないようです。それくらい仏教は日本人の日常的な生活から疎遠になっていくという状況があると思いますね。これは喜んでいいことか悲しむべきことか、皆さんが仏教精神とは何かということが少しでもわかってきたら、これはいささか問題ではないかと思うことになると思います。そういうふうに皆に思ってもらえるような話ができればいいのですが……。

建学の精神と教育理念

光華女子学園

この学園は先にも触れたように東本願寺の大谷智子お裏方がつくられました。とてもきれいな上品な方だったように思います。本や写真で拝見するとそういう感じの方です。この人が高等女学校をつくられた後、総裁として学園にかかわられました。会社とか法人、団体の経営を担当する組織が理事会ですが、その代表が理事長であり、光華女子学園を経営していく人です。初代理事長には東本願寺の幹部の人、大谷家の人がなられ、また初代学長には阿部恵水という方で、東本願寺の宗務総長や顧問をされたお坊様がなられました。その後は、この学園の経営は東本願寺ではなく、阿部恵水先生の等観寺という真宗系のお寺の経営に移っていきます。現在のこの学園を営営されている理事長は阿部恵水初代校長のお孫さんにあたる方で阿部敏行先生です。八代目の理事長になると思います。そこで、この学園は阿部家の経営で運営されているようにみえますが、私立学校法という法律のもとで経営されるので、個人の学園とは

ならず、現代の私立学校を経営するのはどこでも「学校法人」という組織です。光華女子大学や短大を経営しているのは光華女子学園という学校法人であります。この学校法人の理事会の代表である理事長が阿部先生です。私は学長で、学長は大学、短大の学長として任命されている被雇用者です。大学や短大の管理や運営を責任を持って行う立場に置かれています。

光華女子学園の「光華」という校名はどうしてつけられたのでしょうか。創設者であった大谷智子お裏方の書かれた『光華抄』の序を見ますと、『観無量寿經』というお経の中からとってきたとあります。お経の中に「浄土」という言葉があります。これは仏教の独特の考え方ですが、私たちが死んだ後どうなるか、皆さんは考えたことがありますか。人間は必ず死にますね。人間に限らず生物、生きているものは必ず死にます。皆さんはまだ先があると思っておりますが、生まれたものは必ず死ぬ、死んだ後はどうなるか、これは難しい問題です。考えてもわかりません。昔の人は心配だったと思います。現実の生活も苦しいことが多いし、悲惨なことが多い。毎日苦しい生活をしながら、死んだ後、どうなっていくかという心配をしたと思います。特

建学の精神と教育理念

に鎌倉時代は蒙古が攻めてきたり、国内でも争いがあつて、この世の終わりかという状況が続いた時代です。そういう中で、浄土真宗は念仏宗と言われるように、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えれば死んだ後、極楽浄土へ行けますといひます。極楽は楽しく、苦しいことのないところで、極めて楽しいという漢字が書いてあります。楽しい生活ができる浄らかな土地があつて、そこへ行けると考えると心が安まるわけです。浄土宗、浄土真宗は仏様を信じて念仏さえ唱えれば死んだ後は極楽浄土へ行けますよという趣旨の教えを説くのです。浄土がどういふところかといふことを表現した言葉に「その光、華の如く、又星月に似たり」といふのがあります。極楽浄土では光は太陽の光ではなく、星とか月のような清らかな澄んだ光が輝いていて、きれいな楽しい音楽も聴こえてくるところだと。光が華のようにキラキラ輝いていて、お星様やお月様のように澄んだ、きれいな雰囲気が漂っていると説明されています。それがお経の中に書かれているところから、その光の華をとつてきて「光華」といふ名前をつけたということですよ。

光華女子学園の五〇年間の歴史を書いた本が平成二年につくられています。中央図

書館にあると思いますから、関心があったら読んでみてください。お裏方がどうい願いをこめてつくられたかということですが、その本の中には「清澄にして光り輝くおおらかな女性を育成したいという願いにもとづいて」とあります。清らかで澄んでいる、お星様やお月様の光を見てると心が澄んだ感じがするので、そのような清らかに澄んだ気品を備えた女性になってほしい、華のように輝く明るいおおらかな女性に育ってほしいという願いをこめて、この名前がつけられたということです。校章は五条通の看板にも掲げてあるように六角形のような感じのまるい形をしています。そのデザインは大谷家の家紋である牡丹の花をデザインしてあるということです。牡丹の花は気高く、毅然としてしていると解釈されていますから、気品のある上品な女性に育ってほしいという願いも込められていると思います。

校訓は「真実心」。真実心を説明するのは難しいのですが、この言葉は大学本館（一号館）の正面から入って右手の壁に額が掛けてあります。額の字は大谷智子お裏方のご主人であられた大谷光暢というお坊様の書かれた、由緒ある文字であります。真実心とは何か。真実の心、本当の心ということですが、では本当の心はどんな心か。

建学の精神と教育理念

仏教とか仏教精神を十分理解していかないとわかりません。私自身も十分わかっていないのですが、先の本には「み仏の心」だと書いてあります。仏様の心なので、仏様がどういうものか理解していかないとわかりません。これも簡単には説明できないのですが。仏という言葉の意味には三つくらいあると思います。お釈迦様であるゴータマ・シッダルタという人が悟りをひらいた後、ゴータマ・ブツダと呼ばれるようになります。ブツダを漢字で仏陀とおきかえて、そこから日本では仏教という言葉が出てきています。つまり、仏とはお釈迦様のことです。お釈迦様の教えだから仏教と言っています。したがって、仏様とか仏の一つの意味はお釈迦様その人を意味しています。でも普通、私たちは仏様とか仏と聞いた時には、お釈迦様のことと思わないですね。亡くなった人、仏壇に手を合わせる時にそこに祀られている人、一般的には亡くなった人、死んだ人が仏様になつていてと考えます。お釈迦様の意味とは違います。さらに、仏教とか仏教精神を考えていくと、私たちの体の中にも「仏性」が宿つていると言われます。仏性とは仏の性質。私たちは皆、仏につつまれて生きているという考え方がでてくるのですが、それは全く抽象的、観念的で実感できません。自分自身で本

当に感ずることができないから、これをきちんと理解しようと思えば、悟りをひらいて信仰に入らなければわからないのではないかと私は思っています。そういうものをひっくり返して仏の心とか、眞実の心だといっているのではないのでしょうか。日常生活の中で自分の欲望に従って生きている、欲望にとらわれている私たちの心は本当の心ではないということです。そういう心ではない、奥の奥の方にある本当の心、それが「み仏の心」であり、「眞実心」だと理解する、あるいは体得するのです。入学式でも言いましたように「光華広報」がまもなく発行されますが、その中に新入生に贈る言葉として「眞実心」のことを私が理解している範囲で書いておきましたので、それを本当だ、その通りだとそのまま受け止めずに、自分でも考えてみてください。

学園の歌は「祖徳も高き比叡山」で始まります。比叡山は日本の仏教の根拠地ですね。日本に仏教が入ってきたのは聖徳太子の頃で、聖徳太子が大きな働きをされました。その後、空海が始められた仏教が眞言宗であり、最澄は比叡山に延暦寺をつくって天台宗を布教されました。空海はご自分が一人で大活躍をされてその眞言宗も広く広がっていますが、天台宗の最澄はそうではなく、そこからいろんな高弟、立派なお

建学の精神と教育理念

坊さんが次々に出て新しい宗派が開拓されていったという違いがあると思います。親鸞聖人も天台宗から出ています。比叡山で修行されて真宗をひらかれました。法然上人もそうです。そういう意味で「祖徳も高き比叡山」ということになります。宗派を始められた親鸞聖人や法然上人の修行された比叡山はそういう山です。一番も二番も仏とか仏教とかに結びついた歌を大谷智子お裏方ご自身がつくられて、曲は信時潔作曲となっています。信時潔という人は有名な作曲家でしたから、今日、そのメロディを聴かれても、いい感じを受けられたと思います。

大学や短大は学則によって運営されていますが、それらをみますと、それらの第一条にどういう目的で教育をするかが書かれていて、「仏教精神により円満なる人格を涵養し、もって有為なる女性を育成することを目的とする」、「仏教精神によって人格を陶冶し、もって広く文化に貢献する有為な女性を育成することを目的とする」と述べられています。

お釈迦様について

次に、仏教精神とは何かを考えないといけないのですが、これが簡単にはいきません。仏教とは何かということがおぼろげながらもわかっているといけないのです。インドの北の方のカピラ国、詳しく言えばカピラヴァスツ国の王子であったお釈迦様は、王子様ですから何不自由のない生活をされていきました。結婚もされて二九歳までは王子様として豊かな生活をされていきました。でも町に出でみると、貧しい人もいるし、病気になるって寝ている人もいる、死んでいる人も目についたかもしれません。また、動物が他の動物を殺したり、食べたりして生きている、そういう生き物、生命、命が大事だと言いながら、同じ命が他の命を殺している、食べている。そこには絶対的な矛盾に思える状況が現実としてあります。さまざまなことでも悩みに悩んで、結局、王様になる身分を捨てて出家されました。お城を出て修行の道に入られました。六年間本当に苦しい修行をして三五歳になった時、こんなに苦しい修行をしても結論はわ

建学の精神と教育理念

からない、ということ、それ以上の苦しい修行はやめられました。これより先、父親の王様は、王子が家を出て行って修行をするというので五人の人たちを王子につけて、一緒に修行をさせていましたが、その人たちは「釈尊は修行をやめて墮落した」とお釈迦様を非難します。お釈迦様は「何もわからない」という結論で布教もしないつもりだったので、インドで一番偉い神様、梵天から「修行の中で考えた悟りを皆に伝えなさい。布教しなさい」と告げられ、それからお釈迦様の布教が始まります。自分の考えたこと、悟ったことをもとにして、まず一緒に修行をしていた五人の人たちに自分の考え方、悟ったことを話したら、はじめ怒っていた人たちも「その通りだ」と弟子になっていきます。そこからどんどん布教が広がっていきます。そういう悟りをひらいたゴータマ・シッタルタをブツダと呼ぶようになり、それが中国に入ると「仏」という漢字が当てられ、その教えが仏教になり、日本に入って日本では「仏」(ほとけ)ということになります。仏様を祀る大元にあるのはお釈迦様ですが、亡くなって極楽浄土に行ったと思われる、死んだ人たちのことも「仏様」と言うようになります。

お釈迦様の教え

仏教の元、お釈迦様の悟りの元にあるのは「縁起」という考えです。私たちは縁起がいいとか悪いとか言っていますが、そういう意味ではありません。別の言葉では「関係性」と言ってもいいのですが、仏教の基本的な考え方として「縁」というものがあります。英文科の人は辞典でも引いてください。縁というのをどう英訳しているかということ、*causes and conditions* と言っています。「原因」と「条件」。私たちの存在、私たちの生活しているこの世の中はすべて何か原因があり、何かの条件があって、その中に存在しているという考え方、それが根本にあります。

そういう条件の中にある私たちはどういう生き方をしたらいいのかというのが「八正道」であり、「中道」です。お釈迦様は、出家する前の王子の時代は楽しい、裕福な、楽な生活をされていましたが、出家後は大変厳しい修行の生活でした。片方は快樂主義、もう一つは苦行主義です。人間は誰でも楽しい方がいいし、快い方がいい

建学の精神と教育理念

いわけですから、それを追求すればいいのですが、快樂主義だけで生きていくとう
なるでしょうか。それだけではだめです。苦行主義だけで生活するのも大変です。お
釈迦様はそのどちらともだめで中道を行くのがいい、真ん中の道をとるのがい
いと考えられました。苦行主義、快樂主義の極端な生き方ではないのがいいと考えて、
それをもとにしながら、いろんなことを考えて教えを説かれたわけです。

お釈迦様の生年については三つの説がありますが、紀元前四六三年等、三つの年の
どれで計算しても八〇歳まで生きておられます。長生きをされました。悟りをひらか
れたのが三五歳の時、それから八〇歳になるまでいろんなことを話しながら布教をさ
れて、それらがもたくなってつくられているのが仏教の經典です。一杯ありますから
簡単に読んで理解することはできません。日本の仏教では、葬式とか法事の時にお経
をあげてもらいますが、何のことか意味がさっぱりわかりません。インドのものサ
ンスクリット語、パーリ語の言葉で読まれるので、日本語になりません。聴いてもわ
かりません。お経の意味がどういふことをいふことを説明してもらおうと思っ
ますが、それでは有難みがないということかもしれません。お釈迦様が説かれた、あ

るいはお話されたことが後に記録になって仏教経典になっています。仏教には小乗仏教と大乘仏教があります。社会学科で仏教のことを勉強された時、この言葉が出ていたかどうかわかりませんが、小乗仏教は南の方、ビルマ、タイに伝わった仏教です。北の方の中国、朝鮮に広まったのが大乘仏教と言われています。自分たちの方が大きく発展したから大乘、大きな乗物、南の方は小さな乗り物だというわけですが、それは差別的な言葉だといっているので、最近は使われなくなっているそうです。南伝仏教、北伝仏教という言い方もされています。仏教は中国に来てからもいろんな宗派ができます。仏教経典は実に膨大なものになって、宗派はいくつもあります。

仏教徒の生き方

最初に「三帰依文」を読みましたが、帰依は信心する、もう疑いません、信用しますという意味ですから、三つの「仏・法・僧（サンガ）」を信じますということです。仏はお釈迦様。釈尊の言われていることが立派なことなので、お釈迦様を信じます。

建学の精神と教育理念

法は仏教の教えのことです。もとの意味は法則とか決まりという意味です。仏教の教えの大元にはインドの哲学、考え方、宇宙哲学があります。宇宙の法則と考えてもいい、そういうものが仏教の教えのもとにあります。その教えを信じますということです。僧はお坊さん、サンガというのは一人ひとりのお坊さんというより大勢の仏教を勉強しながら布教しているお坊さんたちのことです。三帰依文は仏教の儀式の時に読まれる一つの型式です。それで、先程私も三帰依文を読みました。

では、仏教精神とは何か。どんな考え方、どんな精神が仏教の教えなのかということを考えてもらいたいと思います。一つは生命の尊重。命を大事にしましょうということです。「五戒」という、こういうことをしてはいけませんという戒律の最初に「不殺生」というのがあります。生き物を殺すことをしてはいけません。私たち皆そうですが、私は殺されたくない。皆さんもそうでしょ。殺されるのはかなわない。自分が殺されなくなかったら人も殺してはいけません。これは基本的なことなのですが、今、世界では殺し合いをやっている国がいくつもあります。日本の国内でも平気で人を殺す状況が次から次に出ています。これは仏教精神をきちんと身につけてい

たらできないことです。仮に仏教精神を理解しなくても、少し考えればわかることです。自分が殺されたくなかったら人を殺してはいけません。このように命を大事にしましょうというのが仏教の考え方の基本にあると思います。人を殺してはいけません。自分も人だから。でも命は人だけではない。犬でも猫でも牛でも馬でも動物は皆、命を持っています。人間が殺されたくなかったら牛も馬も犬や猫も殺してはいけません。しかし、できるだけ殺さないようにしようと思っても、皆さんは肉を食べていませんか。鶏や牛の肉を食べていませんか。自分で殺して食べることはしませんが、殺されて食卓に運ばれてきた肉は平気で食べています。おいしいと言って食べています。そんな残酷なことが許されていいのかと考えると食べられなくなります。では、動物を食べなければいいか。植物は命ではないのですか。生き物ではないのですか。動物と植物はちよつと違いますが、植物も命であり、生命です。生き物です。枯れたら死んでいきます。仏教徒の場合は、菜食主義で肉は食べないようにして野菜や果物を食べると言いますが、それでも皆生き物ですね。そういう生き物は殺していいのですか。殺してはいけないと言われると食べるものがなくなります。自分は死ぬしかな

建学の精神と教育理念

い。これは絶対的な自己矛盾ではないでしょうか。宿命とか業と言われるものではないかと思えます。法隆寺の「玉虫厨子」という工芸品に絵が描かれています。そこにはお釈迦様が崖の上から飢えた虎がいる谷に身を投げて落ちていく絵が描かれています。これは、飢えた動物に私の体をあげましょうという、お釈迦様の考えの根本に「無我」、自分を捨ててもいい、我をなくすという考え方を徹底する姿勢ができていたからということなのかと思えます。実際のお釈迦様は八〇歳まで生きて、最後は涅槃寂靜という何の欲望にもとらわれない世界に入っていられることになりましたが、そういうことは普通の人間、私たちにはなかなかできないことです。

「南無阿弥陀仏」とは

ここで「南無阿弥陀仏」の説明をしておきます。「南無」というのは信じます、尊敬します、帰依しますという言葉で、一種の接頭語です。「阿弥陀仏」というのは阿弥陀という仏様のことです。真宗の本尊、信仰の対象とされるもので、仏殿にもその

六文字が書いてあります。阿弥陀というの、阿弥陀仏の仏様のことですが、パリー語のものと言葉で意味をとっていくと「無量寿・無量光」という意味を持っています。私たちは無限の知恵(知慧)を授かり、その無限の知恵を働かせながらここまで生きてきました。生命の歴史は三八億年も続いています。無限の長さを生き続けてきて、今の私たちは存在しています。無限の知恵をもらい、知恵を働かせながら進化してきたから、ここまで来て、霊長類と言われる、こんなに巧妙にできた体になりました。他の動物、生物でもいろんな工夫をして一生懸命生きています。無限の知恵を命が授かって、無限に生き続けようとしています。それが「南無阿弥陀仏」であり、それを信じますということなのだというふうに私は理解してお話しをしました。今日、ここで今の言葉に引きつけて考えると、私達は他の生物、他の命は殺してはいけないと思えますが、それでは、生きていけません。お米も食べ、野菜も食べないといけない、果物も食べないといけない、私はもう肉はほしくありませんが、魚も食べないとタンパク質がとれません。他の生命を食べます。これは命を大事にしなさいということと矛盾します。ある意味で「南無阿弥陀仏」というのは、そういう犠牲になっている他の

建学の精神と教育理念

命、他の生物にお詫びを言っているのではないかとも思います。贖罪の言葉です。「殺している、食べている罪を許してください。犠牲となっている生物に助けられて私は生かされています」。それを「ありがとうございます」と言って感謝しないといけないのです。浄土真宗の一つの大きな柱は感謝することだと言われています。仏壇に向かって合掌をするのはお願いをしているのではないのです。感謝をしているのです。「生かしていただいていることに感謝します」と言って合掌します。そこにつながるのではないかと思います。

次に、「和の精神」(喧嘩をしない)、仲良くするという精神があります。「和を以て貴とす」というのは日本では聖徳太子が言われた言葉です。一七条憲法の第一条に書かれています。でも聖徳太子が使われた言葉ではなく、中国のお坊様も同じ言葉を使っておられたらしいので、専売特許とは言えないのかもしれませんが。仏教の考え方には、皆仲良くしましょう、喧嘩してはいけません、まして人を殺したり、戦争をしたりしないようにするということがその基本にあると思います。

鍋島直樹先生という龍谷大学の先生に一昨年宗教講話をしていただきました。アメ

リカで勉強されてきたので、英語でこの言葉をどういうかという話をされました。「we are different, but we are one.」私たちは皆違っている、でも私たちは一つです。人間一人ひとり皆違う、皆個性を持っています。でも人間としては同じ、命、生命としては皆同じです。他の動物、植物に広げて考えても生き物は皆、同じ命を持って生まれています。一つです。命は一つであれば、皆仲良くしないといけません。喧嘩はしてはいけません。でも、これも、ここにライオンとか虎とかの動物が来て、私を食べようとした時、「ちょっと待ってくれ、仲良くしてくれ」と言っても通じません。その時、「殺されてもいい」と考えるのはお釈迦様はできたかもしれないけれど、私は何らかの形で防衛したい、自分でできなければ誰かに撃退してもらいたいと考えますから、そこには矛盾がありますね。

できるだけ私たちは仲良くしましょう、喧嘩はやめましょう、戦争はしないでおきましょうと考えます。でも、去年の同時多発テロをアメリカが受けた時、大統領をはじめとしてアメリカの大部分の人たちはすぐ報復だと言いました。仕返しだとして、アフガニスタンを徹底的に爆撃しました。それは命を大事にするという考え方には添

建学の精神と教育理念

わないことです。では、テロを許していいかと言われると、それはダメです。テロを防止する、テロが起きないようにしないとイケません。そこを一生懸命やらないといけないのですが、一旦起きたテロに対してすぐに報復することも私は問題だと思っています。

三つ目は「慈悲の心」。仏教の精神、仏教の心は何かと問われると、慈悲が一番に浮かんでくるのですが、慈悲とは何か。「慈」「悲」「喜」「捨」を「四無量心」、四つの美しい心と言います。「慈」は人に樂を与えること、人を樂にすること。「悲」は人の苦しみを抜き取ること。「慈悲」は人に樂しみや樂を与え、苦しんでいる人から苦しみをとってあげるといふ考え方です。「喜」は自分が喜ぶのではなく、人が喜んでいることを一緒に喜んであげること。joy togetherとゆうこと。誰でも自分に関係のない問題で人が喜んでいたら「ああよかったな」と拍手することはできるのですが、そういうことではなく、自分はこれがほしい、他の人もこれがほしい、同じものを二人ともほしいと思った時、どうやって分けるか、分け方の話し合いがつかないで、くじ引きにした結果、相手の人がとった時、「ああよかったね」と言って、とら

れた人も一緒に気持ちよく喜んであげなさいというのが「喜」です。「捨」は何を捨てるのか。分別を捨てるのです。その例として例えば自分の都合で人を助けるのではなく、人のために人を助けること、それが自分にとって良いか悪いかの分別は捨てるのです。人を助けることはいいいことです。でも、その人を助けることによって自分も助かるから助けるというのではだめだということです。相手のために喜んであげたり、助けてあげたりというふうには、助けてあげたのだと考えるということなんです。自分を全部捨てないといけないということです。要するに、自分のためではなく、「人のために」というのがこの四つの中に全部入っています。

そしてその大元には「無我」があります。自分をなくすこと、己をむなしくすることが根本にあります。命が大事だ、人を殺してはいけない、それはわかっています。二人とも殺される状況に追い込まれた時、一人を助けるために自分が死ぬるかどうか。そうするためには自分を無くさないとはいけません。無我にならないとできません。「仲良くしよう」と言っても、自分を大事に考えていたら利害は対立するし、喧嘩になります。自分をなくする、むなしくすることができないと、それもできません。慈

建学の精神と教育理念

悲も「他人のために」ということですから、自分を考えてはいけけない、自分をなくすることができなければいけないということです。大谷智子お裏方の「光華抄」という本の中にも「仏教の根本は無我ということですよ」と書いてあります。

さらに、仏教の専門用語として「四法印」というのがあります。仏法の要約です。仏教の教えの四つのポイントはこれですよというものです。一つは「諸行無常」。二つ目が「諸法無我」。三つ目が「一切皆苦」。四つ目が「涅槃寂静」です。諸行無常というのは平家物語の中に「祇園精舎の鐘の聲。諸行無常の響きあり」と平家が滅亡していく時の話があるので、「無情」と聴こえるのですが、常でない、この世の中のことはすべて変化するということです。これは真実ですね。私たちは、長生きはしたいのですが、必ず皆、死ぬわけです。生まれたものは必ず死にます。地球は回っています。太陽も回っています。毎年同じように動いているけれど、微妙にずれて変わっていきます。太陽だっていつかは爆発します。なくなっていくきます。この宇宙にあるものはすべて変わります。皆さんも、恋人のいる人は、この愛は永遠の愛だと思っているかもしれませんが、それは永遠であってほしいと願っているだけで、条件がどんどん変

わかっていくと恋も愛も変わっていきます。別れたくなくても別れざるをえない時があるかもしれません。ずっと続けていって、最後に死ぬまで、夫婦であって、一緒にやりたいという願いはあっても、絶対に変わらないとは言えないのです。

最後に、宗教はすべて「畏敬の心」「敬虔な心」「感謝の心」をもつことを教えます。私たちの力を超えた大きな力の前に敬虔な心を持ちましょうということですが、それも仏教の心の一つだと思えます。

結 び

時間がなくなりましたので、もう一つの女子教育の問題はレジュメを後で読んでおいてください。六〇周年記念パンフレットの中にも女子教育について三つにまとめて書いたものがありますから、機会があつたらそれも見てください。皆さん自身も女子教育のあり方についていろいろ考えてみてほしいと思います。お裏方の考えの中には、母性教育、母親としての気持ちに力をつけていくためには仏教の考え方が大事だとい

建学の精神と教育理念

う趣旨のことが含まれています。そういうことから仏教精神に基づく女子教育が大事だということ、この学園は始められたということであり、尻切れトンボになりましたが、以上で終わります。

—二〇〇二年四月二五日—